東日本大震災の記録

災害と大学アーカイブズ
―東日本大震災における東北大学史料館の対応―

永　田　英　明

東北地方太平洋沖地震を契機とする数々の災害が、すなわち「東日本大震災」は、数多くの人命を奪い、各地に甚大な被害をもたらした。東北大学の大学アーカイブズとして、東北大学史料館はこの災害にどのように対応したのか。詳細な経緯は後日に譲ることとしたいが、ここでは東日本大震災における東北大学史料館の対応について、現在までの動きを簡単にまとめ報告することとしたい。

一、東北大学史料館の被災状況と対応

１．災害発生時とその後の状況

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分、東北地方太平洋沖地震が発生し、当館が所在する仙台市青葉区の震度は震度 6 弱を記録、館内では長時間にわたって強い揺れを感じた。地震発生時、館内には職員のほか 2 階展示室内に若干の見学者がいた。幸いにして見学者に怪我などはなく、激しい揺れがおさまった段階で 1 階に誘導した。過去の地震の経験から、大きな地震になると屋根瓦が落下するので不用意に館外に出るのは危険であると判断し、しばらく館内で見学者・職員を待機させたあと、様子を見て館外の避難場所に避難・待機させた。館内では事務室や教員研究室・文書庫など各所で書架の資料が落下し、2 階展示室ではシャンデリアが大きく揺れ一部が落下するなどの状況が確認できたが、火災などは発生しておらず、またその後もしばらくは頻々と余震が続いていて作業をおこなうことも危険と判断したため、その日はその後火の元確認など必要最低限の措置を講じ、そのまま閉鎖・帰宅解散とした。

その後休館日である土曜・日曜日を挟んで翌週月曜日から 1 週間は、交通手段の未復旧や、福島原発の事故など災害自体が広がりを見せつつあることなどを考慮し、職員は原則自宅待機とした。その一方で、地震直後におこなわれた緊急建物診断で一応館内にたちいることができるとされていたので、出勤可能な一部の職員のみで被害状況の確認などをおこない、あわせて散乱している資料にビニールシートをかぶせたり書架自体をシートでくるんだりと、雨漏りはじめ予想される二次災害への最低限の対策をおこなった。3 月 21 日（月）からは一般職員も出勤し、被災資料の救出などを開始した。その後後述するような雨漏り被害への対応などに苦心したが、6 月 1 日よりまず閲覧業務を再開し、7 月からは 1 階展示室、10 月からは 2 階展示室の公開を再開している。

２．建物の被害

当館の建物は、1924（大正 13）年に旧東北帝国大学附属図書館として建設されたもので、完成後すでに 90 年近くが経過していたため、地震前から耐震補強工事の検討が進められている状況であった。その意味では、今回の地震で建物の倒壊など壊滅的な状況には至らなかったのは不幸中の幸いであった。しかし建物（特に上層階）の各所では至るところでクラックが発生し 2 階展示室では天井ボード数枚が落下、一部の照明器具も落下破損した（写真 2）。こうした展示室内の被害については、展示室の暫定的な再開のため 8 月中に簡単な補修がおこなわれたが、表面的な補修にとどまるものであり、根本的な復旧には至っていない。

しかしこうした外壁等の損傷以上に、その後私たちを苦しめたのが、屋根の損壊であった。前述のように当館は大きな地震のたびに屋根瓦を落下させ補修を繰り返したが、今回の地震では従来にない規模で大量の瓦が落下し（写真 1)、その結果直下にあたる上層階の部屋（収蔵庫・展示室等）で激しい雨漏りが発生したのである。屋根の補修についてはその後大学施設部との協議で何度となく検討がなされたが、損壊が大規模であること、建物自体が古くまた特殊な構造であること、屋根に葺く瓦の調達が困難であることなどから本格的な改修は遅れ、とりあえずは大きなブルシートで屋根を覆い対応している状況である（写真 3)。なお改修工事については耐震補強工事とあわせ平成 24 年度に実施される予定である。

３．書庫と資料の被災－雨漏りとの格闘

収蔵庫、とりわけ公文書用の書庫では、排架中の資料が大量に落下散乱し、とりわけ別棟の書庫では、書架の下部が床を滑るようにして動き、転倒防止用の補強じたいが損壊してしまった。写真 5 は、大学本部棟書庫における公文書の散乱の状況である。公文書の中には、落下の衝撃でファイルと中身の文書が分離したものも少なくなかった。

しかしこうした地震の揺れそのものによる被害よりもさらに私たちを苦しめたのが、前述した屋根の損壊による「雨漏り」の被害であった。雨漏りは上述した 3 月の地震後一週間の自宅待機期間内にすでに発生しており、当初はシートをかぶせるなど最低限の対応しかできなかったため、雨水に浸かってしまった文書も少なくなかった（写真 6)。また当初たいした被害のなかった場所で後になって激しい雨漏りが発生することもしばしばあり、初期は職員が苦心して作ったブルーシート等による水路で天井から落ちる雨水の流れ

写真 1　屋根から落下散乱した瓦

写真 2　閉鎖中の展示室

写真 3　屋根へのブルーシートかけ

写真 4　書庫内天井に発生したキノコ

を制御し対応していたがそれでも被害を免れず、その安全と思われる場所を探して資料を避難させることを繰り返す羽目となった。

雨水によって水損した資料のうち比較的軽度のものはすぐに自然乾燥させたが、重度のものについては冷凍殺虫用として購入したばかりのフリーザーで冷凍保管し、避難作業が落ち着いた段階で取り出し、簿冊の１枚１枚に紙を挟むなどの方法で自然乾燥させた。こうした作業はおおよそ５月前半頃までかかった。被災した資料は現在は一応安全な場所に避難保管しているが、雨漏りした書庫はまだ現在も復旧されておらず、上述した施設改修を待っている状況である。

写真５　本部棟内書庫の文書散乱状況

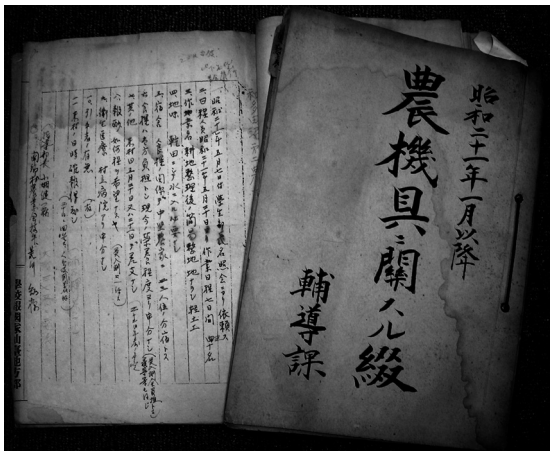

写真６　雨漏りのため水に濡れた資料

二、東北大学アーカイブズとしての災害対応

震災後、以上のような史料館自体の復旧作業に従事してきたが、その一方で、日を追って大きな課題として意識せざるを得なくなってきたのが、こうした災害に際して大学アーカイブズが果たすべき役割とは何か、という問題であった。

私たちがそこで意識したのは、三つの問題であった。

第一は、史料館のみならず、東北大学全体としての資料保全、とりわけ公文書の保全という問題である。その一環として、全学における公文書の被災状況等に関するアンケート調査をおこなった。アンケートの結果は、公文書を保管する書庫、および公文書そのものの被災・破損状況をそれぞれ記述してもらうという簡素なものであった。ほとんどの部局からはともに「さしたる被害はなかった」という回答であったが、当館と同じ片平キャンパス内に所在する部署や、今回の地震で特に被害が大きかった青葉山キャンパスの工学部などで、大きな被害が発生していることが判明している。

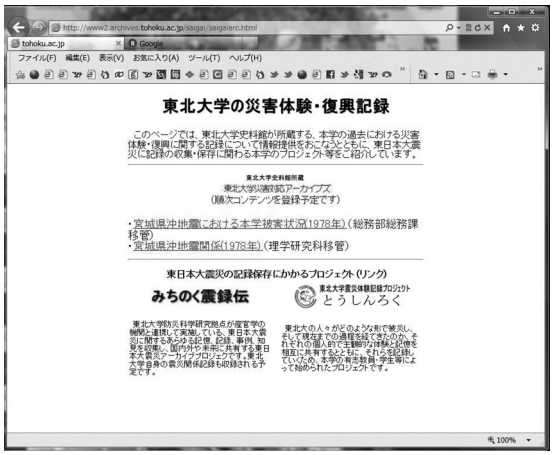

写真７「東北大学の災害体験・復興記録」

第二は、こうした災害に際し、過去の災害に関する対応記録を迅速に提供できる体制を整えておく必要があるのではないか、という点である。こうした観点からできることとして、史料館ホームページ内に「東北大学の災害体験・復興記録」というページを設け、史料館所蔵資料中に含まれる過去の災害対応や復旧に関する記録を電子化し一種の情報パッケージとしてイ

ンターネット上で取得できるようにしてある（写真7）。なおこれらのコンテンツについては、後述する、東北大学防災科学研究拠点が主宰する東日本大震災デジタルアーカイブズプロジェクト「みちのく震録伝」にも提供していく予定である。

そして第三に、より根本的な課題と考えるのが、大学としての震災対応記録の作成保全という課題である。いうまでもないことであるが、いくら災害への対応記録を保存し後世に伝えようと思っても、それが「記録」として作成されない限りは伝えることはできない。先日ニュースを賑わせた政府の原子力災害対策本部議事録問題にもうかがえるように、今回の災害に際しては、発生直後から様々な会議、様々な活動が大学内でおこなわれているが、震災発生から一年経過した現在、こうした災害対応の記録を適切に作成するということについても、そろそろ眼を向ける必要があると考える。この震災はいまも「進行中」の状況であり、その意味で震災に関する各種の記録は「現用」の段階であるが、そうした震災対応に関する文書の適切な形での編纂・管理と将来におけるアーカイブズでの永久保存について早い段階から道筋をつけていくこと、すなわち震災対応文書のレコード・スケジュール設定にかかわる必要があると思う。

震災に関わる記録の作成保存については、学内においてすでに様々な動きがある。たとえば前述のように本学では防災科学研究拠点を核とする東日本大震災デジタルアーカイブズ「みちのく震録伝」がすでにスタートしており、また附属図書館では震災に関する図書や刊行物資料の寄贈を広く呼びかけている。こうした動きと連携しつつ「東北大学」自身の対応に関する記録の保全・保存と将来への伝承に関わっていくことで、大学アーカイブズとしての基本的かつ重要な役割であろう。

東日本大震災は、発生後まだ一年しか経っていない中でも、実に数多くの私たちが普段意識することのなかった様々な課題を浮き彫りにし、わたくしたちの目の前に突きつけている。当館の災害対応もまだ「進行中」の段階であるが、本稿で述べた課題に真摯に取り組んでいくことで、その役割を全うしていきたいと考えている。

＜参考＞

東日本大震災における史料館の被災状況については

http://www.archives.tohoku.ac.jp/news20110611.html

「東北大学の災害対応と復興記録」については

http://www.archives.tohoku.ac.jp/saigai/saigaiarc.html

を参照のこと。

その他史料館の被災状況や対応については、下記の文献でも報告している。

・永田英明・徳竹剛「東日本大震災における東北大学史料館の被災状況と対応」（『アーカイブズ』45号．平成23年10月）

・永田英明「東日本大震災における史料館の被災と復旧状況」（『東北大学史料館だより』15号．平成23年10月）